

青木真美先生 人と学問

石 田 信 博

青木真美先生と初めて話をしたのは、今から30年以上も前になる。学会の懇親会の後、同年代の者が集まった二次会の席だった。その席では、若い研究者達がよく話題にあげる、研究や先輩方について、そしてたわい無いことを楽しく話したのを憶えている。

青木先生も筆者も当時は別の職場にいて、後に同志社大学商学部勤務することになるとは夢にも思っていなかった。2003年から同時に商学部勤務するようになり、再び研究の話や先輩方についての話、そしてたわい無い話を時折交わすようになった。筆者にとって、青木先生の研究や先輩方に関する話は大いに参考になった。それ以上にいつも楽しかったのはたわい無い話を聞いているときであった。

青木先生は、早稲田大学政治経済学部を卒業後、財団法人運輸調査局（現、一般財団法人交通経済研究所）で研究員として25年間勤務され、2003年より同志社大学に移ってこられた。

青木先生の研究領域は公共交通・都市交通であるが、その中核をなすのは、何といっても「ドイツ運輸連合」に関する研究である。運輸連合やヨーロッパの鉄道については、若くから『運輸と経済』（運輸調査局）などに多数の論文を執筆されていて、ヨーロッパの交通政策や鉄道問題の研究分野においては青木先生の存在を知らない者はいなかった。筆者は都市交通や旅客交通については門外漢であるが、青木先生の論文を読みながらよく勉強させてもらった。

研究の集大成は『ドイツの運輸連合制度の意義と成果』（日本評論社、2019年）であろう。本著書は、ドイツ運輸連合に関する一連の研究成果をまとめたものであるが、その内容は交通研究者の間でも高い評価を得て、2020年度鉄道史学会住田奨励賞を受けている。

本著書には、青木先生の研究の契機、問題意識、意義が記されている。

「筆者が運輸連合と初めて出会ったのは、大学時代の1970年代にAIESECの交換留学生事業を利用して渡独した際であり、その当時はゾーン制で乗換え自由という便利さに驚いたことを覚えている。ドイツ滞在後に訪れた、パリやロンドンでも地下鉄とバスの共通回数券や1日券などが普及していることを知った。…（中略）… 運輸調査局に奉職して、ドイツならびにヨーロッパの鉄道政策の調査研究を行う中で、運輸連合に

ついでに論文や文献にも数多く接することとなり、欧米の都市交通事情にも詳しくなつた。研究対象として運輸連合を意識したのは、1980年代後半であった。」(あとがき、212ページ)

「本書は、1965年以降長期的に運輸連合制度の成立と変化を、交通政策および行政政策の視点から論ずるものであり、…(中略)…クルマ社会の進展下において、公共交通への手厚い助成が行われた契機と理由、それによる社会の変化、運輸連合という制度が誕生した行政上の背景、運輸連合制度の意義や他国への示唆などを総括的に解明しており、交通政策および交通経済学において大きな意味があるものと考えられる。」(第1章、11ページ)

また、青木先生は、行政や民間団体の委員等を数多く務められ、研究成果を着実に社会に対して還元されてきた。

若くして出会ったテーマ「ドイツ運輸連合」を長年にわたって徹底的に研究しながら、研究成果を継続的に発信し、社会還元し続ける、青木先生の学問に対する厳しい姿勢には頭が下がるばかりである。

青木先生の存在は交通研究者の間で知られているだけではない。鉄道ファンの間でも有名である。筆者は、大学内で教職員や学生から青木先生について問われたことが何度もある。もちろん学外でも。彼らはいうまでもなく鉄道大好き人間である。中には、「青木先生は鉄道マニアの間ではマドンナ的存在なんです…」と言う者もいた。これは、読者の多い鉄道専門誌などで一般の人々に対しても、研究成果を分かりやすく多数発信されているからであろう。

多趣味な先生でもある。筆者の知る限りでも、グルメ、お酒、歌舞伎、ラグビー…と極めておられるものが多い。仕事仲間と青木先生の話になると、飲みっぷりの良さが必ず話題に上がる。とても楽しいお酒だと…。いろんな話を楽しく語ってくれと…。豪快、そして繊細。青木先生を知る人はそう言う。

研究とその社会還元をこれからも続けてください。多趣味をさらに極めてください。引き続きご活躍されること、そしてご健勝をお祈り申し上げます。